

エジプト出張報告書(2013.3.21~3.28)

小林幸江・谷口龍子・榮谷温子

日程

- 3/21 (木) 21:20 成田発(EY871)、アブダビ経由
- 3/22 (金) 12:25 カイロ着(EY653)
- 3/23 (土) 11:00 カイロ大学日本語学科専任講師高田先生と懇談
- 3/24 (日) 10:00 カイロ大学日本語学科主任カラム氏、ハサン氏、イマーン氏と懇談
10:40 小林幸江先生講演、留学についての質疑応答
13:00 授業見学(3年生翻訳科目、ハーネム先生担当)
15:00 カイロ大学キャンパス内、中央図書館見学
- 3/25 (月) 9:00 カイロ日本文化センター所長高橋氏、副所長佐藤氏と面談
13:00 ミスル科学技術大学訪問、学科長、日本語担当イサム・ハムザ氏と面談(小林、榮谷)
15:00 カイロ大学日本語学科主任カラム氏と面談(谷口)
- 3/26 (火) 11:00 アインシャムス大学日本語学科授業見学(1年生翻訳科目、ネビー
ン先生)
12:00 ロールプレイ調査(アインシャムス大学日本語学科学生有志9名)
12:30 アインシャムス大学日本語学科主任久野氏と面談
13:00 本間講師、土井講師と面談
- 3/27 (水) 03:50 カイロ発(EY650) アブダビ経由
- 3/28 (木) 12:50 成田着(EY878)

1 カイロ大学訪問

1-1 訪問スケジュール

- 3月24日(日) 訪問者: 小林幸江、谷口龍子、榮谷温子
- 10:00~10:40 カイロ大学日本語学科主任カラム氏、ハサン氏、イマーン氏と懇談
- 10:40~14:00 小林幸江先生によるスピーチ(東京外国語大学における留学生受け入れの状況)、留学に関する質疑応答
- 14:00~15:00 授業見学(3年生翻訳科目、ハーネム先生担当)
- 15:00~16:00 カイロ大学キャンパス見学、カイロ大学の沿革紹介ビデオ鑑賞
(於中央図書館)
- 3月25日(月) 訪問者: 谷口龍子

14:30~15:30 カイロ大学日本語学科主任カラム氏

1-2 概要

1-2-1 日本語学科主任カラム教授、ハサン助教授、イマーン専任講師からの聞き取り

- ・2011年の政権交代以降、大学内の教育体制は徐々に整いつつある。現政権は教育に力を入れており、教育関係者への待遇が改善される方向にある。

- ・近年日本語学科にはエジプト国内だけではなく、U.A.E、中国、スーダン、シリアからの留学生も在籍しており、アラビア語を母語としない学生への教授法が課題になっている。

- ・現在日本に留学している学部の交換留学生は3名（筑波大学、拓殖大学、関西大学）、大学院在籍者（東京大学、名古屋大学、上智大学、創価大学）は4名でそのうち3名は国費留学である。2013年度秋学期には東京外国語大学に交換留学生を1名送る予定である。今後も継続的な留学生の受け入れを希望する。

- ・カイロ大学では日本人教員が不在の時期があったが、2011年度から2名の日本人教員（うち1名は東京外国語大学で日本語教育特化コース修了の高田祥子氏）が教鞭を取っている。日本語学科の学生たちのコミュニケーション能力の向上のみならず、学生たちへの良い刺激となり、交流協定校との事務連絡など行政面での貢献も大きい。

- ・日本語教育関連の教材は、カイロ大学准教授ワリード・ファルーク・イブラヒム氏による『日本語・アラビア語 語彙対照研究に基づくアラビア語シソーラス』、『アラビア語母話者のための日本語文法』などが出版されている。



カイロ大学中央図書館



学内の壁には新憲法反対の文字

1-2-2 小林幸江先生によるスピーチ（東京外国語大学における留学生の受け入れ体制について）、留学に関する質疑応答

日本語学科の教員や大学院生、学部生を対象に小林幸江先生による留学生受け入れの状況についてスピーチが行われた。

主な内容：小林先生により、東京外国語大学留学生日本語教育センターにおける留学生

受け入れの歴史や状況について話があり、ビデオ上映が行われた。東京外国語大学では1970年より国費留学生を中心として世界各国の留学生に対して日本語教育が行われており、教員の質も高く、言語教育、文化、歴史など多様なカリキュラムに恵まれた学生たちは日本語能力が向上するだけでなく、日本人学生や他国の学生たちと交流する機会を多く持つことができる。

スピーチ終了後は、教員や大学院生から、エジプトの学生の日本語学習における課題、日本語教育のあり方で今まで変わらない特徴等、多くの質問が挙がった。



小林幸江先生のスピーチ風景



参加者の集合写真

1-2-3 授業見学

ハーネム専任講師による3年生翻訳の授業を見学した。当日は、「カイロの交通事情」というテーマで、パワーポイントを使用し5分程度の意見スピーチが行われた。スピーチの前に単語シートが配られた。内容は、現地における交通の問題点を指摘し、いくつかの対策を述べるというもので、日本語能力（発音、語彙、文法や待遇表現等）だけでなく、資料の準備、内容や組み立て等、中上級レベルとして十分に質の高いスピーチであった。

スピーチ終了後、学生たちは評価シートに記入し、それぞれ感想を口頭でも述べ、最後に教員がコメントをするという授業の流れであった。日本語の発音、文法その他スピーチのまとめ方などについて学生や教員からコメントが出された。

担当教員であるハーネム氏は、日本の大学で日本語の文法を研究し、学位を取得した方で、2011年秋から1年間博報堂研究者奨励事業により本学国際日本研究センターで研究活動を行っていた。日本語による表現力は高く、授業は、完全な直接法により行われていた。



ハーネム先生による授業風景

1-3 雑感

カイロ大学訪問中、多くの大学院生たちから、日本の大学院での受け入れ体制、日本留学の手続きの方法、研究計画の書き方などについて具体的な質問が相次いだ。彼らの日本語能力の高さや研究に対する潜在能力は、我々との日本語によるやり取りや質問の内容などから十分窺えるものであった。しかし、現地では日本留学の方法、必要な日本語能力、留学に必要な手続きや書類など十分な情報が希望者に伝わっていないようである。留学を切望し、その方法を模索している学生たちのために、公費留学、企業支援など様々な日本留学の選択肢に関する情報を具体的に示し、日本での留学生生活がどのようなものかその実際を紹介できるような場が必要であると感じた。

2 国際交流基金カイロ文化センター訪問

2-1 訪問の概要

- ・日時：3月25日（月）9:00~10:30
- ・対応いただいた方：高橋正和所長・佐藤摩耶副所長
- ・訪問者：小林幸江・谷口龍子・榮谷温子
- ・目的：日本語教育事情調査

2-2 記録

1) 文化センターの施設見学・活動状況

- ・閲覧は無料、登録者（有料）は日本語教材を除く図書等を借りることができる。
- ・施設：展示コーナー（訪問時は東北大震災関係の書籍等展示）、畳コーナー（日本文化体験、囲碁・将棋の詰所にもなっている）、図書：英語・アラビア語での日本紹介図書、図録、画集、文学書・趣味の本・雑誌・漫画本等
- ・日本語教室：教師にはエジプト人講師の他、エジプト在住の邦人講師が在籍し、初級～上級10レベルを開講する他、履歴書の書き方などを学ぶビジネス日本語や小学生向けキッズコース等の講座も実施。昨年11月からオフィス周辺状況を受け休講。

(1週間後に、ナイル川対岸のドッキ地区に別スペースを借りて講座再開予定。)

2) エジプトの現状

- ・エジプトは中東域内のものづくり大国。製造業が発達している。エジプトの人材が湾岸諸国の医療分野で活躍している。
- ・モルシー大統領は、高等教育の充実を重要政策の1つに掲げている(大学教員の給与増実施、高等教育機関増計画等)。

3) カイロ大学の日本語

- ・カイロ大学の日本語スタッフはエジプトで最も充実している。
- ・日本留学で学位を取得し、帰国後カイロ大学で指導にあたることは日本語学科の力を高めることにもなり留学の意味は大きい(大学の専任になるためには博士号は必須)。
- ・カイロ大学の教員は、よく教材がないというが、教材開発には関心を示さない(教材は昇任人事等では1点だけおまけとしてカウントされるようである)。また、基金の図書拡充プログラムでは、教員の個人的な研究に必要な書籍類、院生のための研究資料が多く申請されている。

4) 文化センターの役割

- ・一般の人たちへの日本語教育普及を図ると同時に、高等教育機関でエジプト人教師が自立して日本語学科を運営できるよう支援(現在はアインシャムス大学に2名教員派遣)。

2-3 雑感

- ・センターはタリハール広場近くにあり、軍の車が常駐し物々しい警戒の中にあった。そのような状況で機能を果たすのは難しく、センターの移転も考えているとのこと
- ・今回の訪問で、交換協定等による日本留学の成否はエジプトの大学の日本語学科の将来に直結していることがわかり、エジプト人学生の日本留学の意味を再認識した。



日本語教室





センターの窓からタハリール広場（画面奥）を臨む。カスル・エルアイニ通りとタハリール広場が、巨大コンクリート・ブロックで封鎖されている状態である。

3 ミスル科学技術大学訪問

3-1 訪問の概要

- ・日時：3月25日（月）12:00~14:30
- ・対応いただいた方：

ミスル科学技術大学言語翻訳学部長 Dr. A モーセン アブーサイド

カイロ大学文学部教授 Dr. ハムザ・イサム、Dr. ハーネム、Dr. ワリード

- ・訪問者：小林幸江・榮谷温子
- ・目的：日本語教育教材調査

3-2 記録

1) スケジュール

- ・ハムザ先生のお部屋（フランス語と同室）で、歓談の後、学部長室に移動。そこで若干の情報交換を行った。その後、管理棟での昼食会に招かれた。

2) 大学

- ・ミスル科学技術大学は私立大学で、2005年に言語翻訳学部の中に日本語学科を新設。学生の8割は中東諸国からやってくるとのこと。国立大学とは違い、フレキシブルな運営・教育ができるとのこと。
- ・日本語科にはカイロ大学から教員が出講している（ハムザ先生は週2日出講）。
- ・日本の大学と協定を結び、日本から留学生を受け入れることを希望されている。

3) キャンパス

- ・カイロ市から自動車で1時間半ほどのところにある。高速道路沿いに砂漠を開拓して新しい街ができている。水は、砂漠の下を流れるナイルの地下水を利用している（ハムザ先生）、近い将来は水問題が深刻になる（ハーネム先生）等のお話を伺った。
- ・キャンパスは、新しく開放的で緑が多く、勉学環境としては恵まれている。学生の多くは、キャンパス付近の宿舎に住んでいるとのこと。



清潔で緑あふれるキャンパス



大学の象徴ともいえる大図書館

3-3 雑感

- ・ハムザ先生には、海外の日本語教育機関調査の協力依頼を快諾していただいた。
- ・短い訪問ではあったが、ハムザ先生のお話の端々にカイロ大学同様に日本語学科を盛り立てていこうという強いお気持ちが感じられた。
- ・学部長（75 歳ぐらい）は、40 数年前米国のテキサス大学で言語学の博士号を取られたとのこと。お忙しい中、我々の訪問を歓迎してくれた。日本からの留学生派遣を強く希望され、また、キャンパス内の安全を強調されていた。
- ・カイロ大学の教員に大きく依存していることから、エジプトにおける日本語教育の現状、カイロ大学の日本語学科の位置が垣間見られる。
- ・今回の訪問は、昼食会というハプニングが入り、日本語教育教材調査は達成されなかった。

4 アインシャムス大学

4-1 訪問の概要

- ・日時：3 月 26 日（火）11:00~14:30
- ・対応いただいた方：
 - 国際交流基金日本語上級専門家・アインシャムス大学主任客員講師：久野元氏
- ・訪問者：小林幸江・谷口龍子・榮谷温子
- ・目的：日本語学習者のデータ収集



外国語学部（アル＝アルスン）正面



日本語学科の教員室兼事務室

4-2 記録

1) 久野先生とのお話

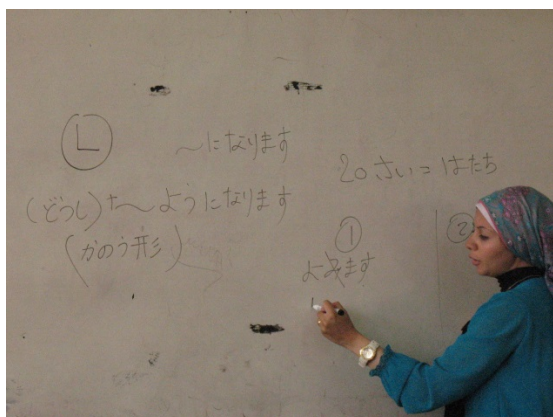
- ・ムバラク政権時代は、キャンパス内に警官が常駐していた。失脚後、自由にもの言えるようになり、授業システム改善委員会が教員の不正行為をチェックする等、機能するようになったとのこと。また、教員の給与が1.5倍増えた（ただし、現地採用の日本人教員は1か月300ドルほどに据え置かれたまま）。
- ・久野先生が赴任された3年前は、大学院は国際交流基金から派遣された教員2名と現地雇用の教員（日本人）1名で運営されていた。同基金から派遣された教員は、基金との取り決めを超えて1週25時間指導していた。講師を雇うよう大学側に要求し、いろいろな経緯を経てカイロ大学に教員派遣を要請したが、実現は難しかった。2012年度以降、大学院の新入生は受け入れていない。学部修了後、カイロ大学の大学院に進学。
- ・現在、アインシャムス大学から6名日本に派遣されているが、戻ってこない者も出てきている。アインシャムス大学に戻る魅力がなくなっている。
- ・学部在籍生（2013）：1年生（28）、2年生（7）、3年生（3）、4年生（17）
- ・日本語学科教員室の日本語関係図書は結構充実しており、学生に貸し出し可。
- ・エジプト教育情報

入学試験はなく、全国統一の高校卒業試験の得点により合否が判定される。学部により競争率の高い低いあり。日本語学科は人気があり、上位者から取っている。修士は、学部卒業後2年のコースワークを終了し、10年以内に論文書けばよい。

2) 授業見学

- ・1年生（24人出席・うち男子学生は2人）のアラビア語短文和訳の授業（「～になる」「～たら」）
- ・文法は週5日、翻訳（和訳アラビア語訳）の授業は週1日（4時間）行っている。
- ・基金の教師養成講座を修了した現地の若い女性教員が日本語とアラビア語を対照させ

て指導していた。



訳し方を説明するネビーン先生



『パスポート日本語アラビア語辞典』や『ふりがな英和辞典』などが貸し出される。

3) 現地採用の教師とのお話

- ・本間先生（女性）：大学院で2年日本語教育修了。エジプトの前は中国で5年半教えていた。2012年9月着任。週5コマ（1コマ2時間）指導。中国では、会話の指導が中心だったが、エジプトでは日本語全般を指導している。
- ・土井先生（男性）：日本語教師養成機関で420時間修了。2011年に着任。卒論の査読も行っている。作文指導に関心がある。



日本語及びアラビア語によるロールプレイのデータ収集に協力してくれた学生たちとともに。

4-3 雑感

- ・キャンパス内でスカーフをしない女子学生が目立った。学生が積極的に、話しかけてきたり授業に参加したりしている姿が印象的であった。
- ・訪問前、外国語教育の名門校と聞いていたので、大学院入学者を中止している現状

を知り驚いた。エジプトにおける大学運営の難しさを目の当たりにした思いである。

- また、現地採用のお二人のお話からは、現地での日本語教育にやりがいはあるものの待遇がひどく（現地採用日本人教員の給与は 1600LE(約 23,000 日本円))、いつまで続けられるかわからないとの意見も聞かれた。エジプトの財政事情によるところは大きいですが、このような教員が海外の日本語教育を支えていることを思うと矛盾を感じる。